

## ニコラ・サルコジの「ポジティブなライシテ」と 市民宗教の論理

—— 2007 年から 2008 年の発言を中心に ——

伊 達 聖 伸

### は じ め に

現職のフランス大統領ニコラ・サルコジは、内務大臣時代より、宗教問題について積極的な発言を繰り返してきた<sup>1)</sup>。それは、宗教をフランス社会の統合に役立てようとするもので、共和国の基本原則であるライシテ（非宗教性、脱宗教性、世俗主義、政教分離）のあり方に変更を加えるものだと目されている<sup>2)</sup>。

宗教とライシテの問題は、大統領選挙の際にはあまり重要な争点とはならず、またサルコジが大統領に就任してからも、半年ほどはあまり大きな話題にはならなかった。だが、2007 年の年末以降、この問題はたびたびクローズ・アップされている。それは大統領が、ローマでの演説（2007 年 12 月 20 日）を皮切りに、リヤド（2008 年 1 月 14 日）、CRIF（在仏ユダヤ系団体代表評議会）の晩餐会（2008 年 2 月 13 日）と立て続けに、宗教とライシテについての見解を表明したからだ。さらに、教皇のフランス滞在を迎えた際にも、宗教とライシテに関する演説を行なった（2008 年 9 月 12 日）。

これら一連の発言の機会に見られるサルコジの主張や見解は、基本的には内相時代と大きく隔たっているわけではない。だが、大統領として演説を行なうことで、内外に与えるインパクトはいつそう大きくなっていると言えるだろう。

そこで本稿では、これらの演説を検討することで、サルコジの政教関係についての基本的な考え方を再確認し、今後のライシテの方向性を占う議論の場を構築したい。大統領の演説は、いずれも周囲に大きな反応を引き起こしたもので、一連の発言を見ていくと、それなりの一貫性も窺えるが、いくつかの修正の跡も浮かびあがってくる。特に、「ポジティブなライシテ」（*laïcité positive*）というキーワードに注目したい。大統領はこの言葉を一貫して用いているが、その内容は必ずしも明確ではない。一連の発言のなかで、いくつかの修正を加えることを余儀なくされたあとでは、この言葉を用いる意義がどこにあるのかが、いつそうわかりにくくなっている。それでも、「ポジティブなライシテ」という言葉は、ライシテの新しい方向性を指し示しているように思えてしまう。それは、まさに現在のフランスにおいて、ライシテがひとつの転機を迎えているからなのだろう。だが、語感としては好ましいこの言葉によって、サルコジが意図している

ものは何なのだろうか。そこには、「落とし穴」や「危険」があったりはしないだろうか。本稿では、「市民宗教」という概念に依拠しながら、その点を批判的に分析していきたい。

議論の手順としては、ラテラノ、リヤド、CRIFの晩餐会、そしてエリゼ宮で発せられた4つの演説の要点を示しつつ<sup>3)</sup>、個々の演説が招いた反響を簡潔にまとめていく。各演説が、それぞれの目的を持ちながら、互いに内的な連関を保っている点を明らかにする一方、「ポジティブなライシテ」の用いられ方の変化に注目する。そのうえで、サルコジが、カトリック的伝統を再強化しつつ、アメリカ・モデルを部分的に取り入れようとしている様子を浮かびあがらせていこう。

## 1. ラテラノでの演説

2007年12月、サルコジは大統領となってからはじめて教皇庁を訪れ、聖ヨハネ・ラテラノ大聖堂の名誉参事官となった。意外に思われるかもしれないが、ライシテの国フランスの大統領がこの地位を得ること自体は、むしろ慣例的である。実際、第五共和国においても、ド・ゴール、ジスカール・デスタン、シラクの先例がある。だがサルコジは、歴代の大統領とはかなり異なった調子の演説を行なった。

演説のスピーチ・ライターは、当時大統領官房長 (*directrice du cabinet*) だったエマニュエル・ミニョンと、ドミニコ会修道士フィリップ・ヴェルダンの2人と言われている<sup>4)</sup>。

ラテラノの演説の全体的な特徴として第1に挙げられるのは、フランスの歴史とカトリックのつながりをことさらに強調しているということである。サルコジは、フランスの国家元首がラテラノの名誉参事官になるというアンリ4世以来の「伝統」に自分自身を位置づけながら、「長いあいだ私たちの国家を教会に結びつけてきた特殊な絆」について述べている。「クローヴィスの洗礼によって、フランスは教会の長女となりました。[……] キリスト教の信仰が、フランスの社会、文化、風景、生き方、建築、文学に深く浸透したからこそ、フランスは教皇庁と非常に特別な関係を有しているのです。フランスのルーツは本質的にキリスト教的なものであります」<sup>5)</sup>。

第2の特徴として挙げられるのは、従来のライシテを「ネガティブ」ととらえ、それによって「ポジティブなライシテ」(*laïcité positive*)の必要性を訴えていることだ。サルコジは、これまでのライシテは宗教の役割を重要視してこなかったと言う。「ライシテに基づく共和国は、長いあいだ、精神の熱望の重要性を過小評価してきました」。だが、これからのライシテは「ポジティブなライシテ」、すなわち「宗教を危険とは考えず、むしろ魅力と見なす」ライシテでなければならない<sup>6)</sup>。

「ポジティブ」というフランス語には、さまざまな意味があり、そのなかには「好意的な」とか「積極的な」というニュアンスも含まれる。だとすると、「ポジティブなライシテ」とは、宗教に対して「好意的」で、これを「積極的」に活用しようとするものであるという意味に取ることができる。他方で、「現実的」とか「実際の」という意味もある。これは、ライシテがかつて

のような市民の動員力を失っている現状において、宗教の力を利用しようという意味に解することができるだろう。さらに、「ポジティブ」には、「明確な」という意味もある。だが、この意味ではサルコジの「ポジティブなライシテ」の内容は、あまり明確にされていない。

したがって、「宗教を魅力と見なす」「ポジティブなライシテ」と言っても、わかりにくさが残る。それでも、演説の全体的な狙いを理解することは比較的容易である。ライシテはこれまで、政治と宗教の関係を定める法的な諸規則というにとどまらず、共和国の理念としての役割を担い、国民国家のイデオロギーとして機能してきた。だが、現在ライシテは転機を迎えており、従来のように「抽象的な市民像」——みずからの出自を括弧に入れ、共通善を目指して政治参加するような市民像——を振りかざすライシテは、人びとの心を引きつけるような理念ではなくなっている。そこでサルコジは、熱心なカトリック信者が持っている価値と希望が、今日のフランスを活性化するために必要だと述べているのである。

サルコジは、ライシテは宗教の社会的役割を認めることによって、「ようやく成熟の段階に達した」と述べる。演説の狙いは、そのようなライシテによって、「フランスのキリスト教的なルーツ」を認め、さらにそれを「価値化する」ことである<sup>7)</sup>。

予想されるように、カトリックの歓心を買おうとしているこの演説は、責任ある地位にあるフランスのカトリックの耳には心地よかったようだ。ドミニコ会修道士のジャン＝ミゲル・ガリグは、この演説を「現実的で創造的」だと評価している。そして、大統領が宗教の社会的役割を強調したことは、政治とライシテが成熟の段階に入ったことを示していると述べている<sup>8)</sup>。

だが、ラテラノの演説は、言論界全般には、むしろ戸惑いや反発を引き起こしたようだ。少なからぬ研究者たちが、サルコジの歴史観やライシテ理解に疑義を差し挟んでいる。福音主義的プロテスタントの研究を専門にする宗教社会学者のセバスティアン・ファスは、この演説のなかに少なくとも 11 件の間違いがあると指摘する。ここでは、そのうちのいくつかを紹介する。

- ・大統領は演説のなかで、「クローヴィスの洗礼によって、フランスは教会の長女となった」と述べている。だが、これは間違いだ。教会の長女と呼ばれるようになったのは、クローヴィスの洗礼からおよそ 1 世紀経ってからのことである。
- ・演説のなかには、ラテラノの聖ヨハネ聖堂を指して、「ローマと世界の全教会に冠たる源」といった表現が見られるが、これは教会をカトリックと同一視するものだ。世界には、ローマを中心とは思っていないキリスト教徒が、およそ 10 億人はいる。
- ・大統領は演説のなかで、ライシテはフランスをキリスト教的なルーツから切り離そうとしたという趣旨の発言をしているが、これは、ライシテとライシテ強硬派の論調を取り違えている。ライシテそのものは、フランスをキリスト教のルーツから切り離そうとしたことはなかった。
- ・大統領の発言によれば、「カトリックは私たちの大多数の宗教」だという。だが、2007 年の

調査によれば、自分のことをカトリックだと規定しているフランス人は51パーセントで、そのうちで神を信じている者は52パーセント、毎週ミサに通っている者は8パーセントである。このようなカトリックは、自分たちのことをマイノリティだと感じている。つまりフランスのカトリックは、マジョリティの宗教ではなく、マイノリティの宗教になっているのだ。<sup>9)</sup>

ファスの指摘は、いかにも細かい揚げ足取りのように見えるかもしれない。だが、これは意義の小さな作業ではない。おそらくファスは、サルコジの歴史観が修正主義的だからこそ、事実を突きつけて批判することが重要だと考えているのだと思われる。

ライシテ研究の第一人者ジャン・ボベロもまた、サルコジの演説に見られる歴史理解を疑問視している。たとえばサルコジは、フランスにおけるライシテの確立が「カトリック、聖職者、修道会に苦痛を与えるものだった」としたうえで、1905年法は「リベラルで寛容で中立的なテキストだという解釈」が「事後的になされた再構築」だと述べている。だが、1905年法はすでに当時から「リベラルで寛容で中立的」であったはずなのだ。

ボベロの指摘に従えば、サルコジは3つの点において、ライシテの価値を意図的に低めている。すなわち、サルコジの理解では、1) 政教分離法は1905年の時点では自由の法ではなかった、2) カトリックと共和派の争いが解決したのは、ライシテ原理のおかげではなく、カトリックの模範的な振る舞いがあったからだ、3) ライシテは、フランスをキリスト教的なルーツから切り離そうとした、ということになっている。このような「ネガティブなライシテ」理解こそが、「ポジティブなライシテ」の提唱を可能にしている。だが、ボベロによれば、そのような歴史認識は端的に誤りである<sup>10)</sup>。

さらにボベロは、ラテラノでの演説が宗教的信仰（なかでもカトリック）を特権化していることを問題視する。というのも、このことによって、宗教に依らない他のさまざまな信念や信条が低く見られることになるからだ。これは、あらゆる信念と信条を尊重するというライシテの原理に抵触する<sup>11)</sup>。

なお、従来のライシテをネガティブにとらえる大統領の演説のなかで、特に大きな波紋を呼んだのが次のくだりである。「さまざまな価値を伝達し、善悪の区別を教えることにおいて、[ライシテ陣営の]小学校教師はけっして司祭や牧師の役割を代行することはできないでしょう[……]。なぜなら、小学校教師には、人生を犠牲にするという根本的な姿勢と、希望に支えられた参加というカリスマがどうしても欠けてしまうからです」。この発言は、そもそも歴史的事実に合致しない。というのも、とりわけ第三共和政の小学校教師の教育は、献身や犠牲の精神に支えられていたものにほかならなかったからだ。現代においても、たしかにライシテの理念は弱まっているかもしれないが、それを誇りにしている人たちがいる。この発言が重大だと受け止められたのは、現にライシテの価値の伝播に努めている現場の教師たちの意気を殺ぐものだったからである。ま



たこの発言は、伝統的な共和主義に価値を置く哲学者たちの怒りも買った。

冷戦以降のフランス共和主義の再強化という方面で、影響力の大きい哲学者レジス・ドゥブレは、大統領のこの発言について、次のように述べている。「フランスに左翼というものがあるなら、共和国大統領の口から発せられたこの不正に対して、100万もの市民が、反対のために街路を練り歩いたことだろう」。サルコジは、今の世のなかは物質主義にまみれている、それゆえ精神的なものや宗教を大切にしていける必要があると主張する。だが、ドゥブレによれば、これは共和主義に根差した公的精神の鍛錬を忘れることで、ライシテを歪曲するものである。興味深いのは、ドゥブレ自身も、ライシテは旧来のままでいることはできない、宗教に向き合う態度に変化が必要だと考えていることである。だが、ドゥブレとサルコジではその方向性が違う。たとえばドゥブレは、これまで公立校が教育のライシテの名のもとに宗教そのものから距離を取ってきたことを踏まえて、これからは公立校でも「宗教的事実の教育」が必要だという立場に立っている。つまり、ライシテの枠組みのなかで、宗教を事実として扱うことを積極的に推進しようとしている。だが、ドゥブレの目から見ると、サルコジがしようとしているのは、「ライシテという事実を信心の方向に捻じ曲げること」(*détournement dévot du fait laïque*)と映るのである<sup>12)</sup>。

ドゥブレは、アメリカ型の民主主義とフランス型の共和主義を対比したことで知られる論客である<sup>13)</sup>。フランスでは、アメリカと異なり、市民生活と宗教は切り離されている。ドゥブレは、サルコジの目指すライシテが、アメリカの市民宗教に近づくものであることを示唆している。実際サルコジは、後述するように、フランス型の市民宗教ではなく、アメリカ型の市民宗教をモデルとしているところがある。

## 2. リヤドでの演説

2008年1月、サルコジはサウジ・アラビアのリヤドを訪れ、アブドラ国王と対談し、フランスとサウジ・アラビア、さらにはアラブ世界との関係について見解を述べている。このときのスピーチ・ライターは、サルコジの特別顧問を務めるアンリ・ゲノーと言われている。

この演説でサルコジは、すべての文明は宗教的で、それは人間の生活にとってたいへん重要であると述べている。「それぞれの文明の深いところには、何か宗教的なものがあります」。ここには、宗教が社会生活のなかできわめて大きな役割を果たしているサウジ・アラビアや、アラブ世界の立場を尊重しながら、フランスにおいても宗教が重要であることを強調する戦略が窺える。

「そして、それぞれの文明には、何か普遍的なものがあります。これが、その文明を他のすべての文明に結びつけているのです」。こうしてサルコジは、さまざまな宗教の違いを認めながら、違いを超えた共通性の存在を示唆する。「おそらく、イスラーム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒は、同じやり方で神を信じてはいません。おそらく、同じやり方で神をあがめたり、神に祈ったり、仕えたりはしません。しかし、深いところでは、彼らが祈りによって呼びかけるのが同じ

神だということに、誰が異議を唱えることができるでしょうか<sup>14)</sup>。

このような「神」は、単に一般的な理念としての神ではなく、「人間の法外な傲慢と狂気に対する防波堤」であるとサルコジは主張する。それを参照することは、現代の社会問題に対する処方箋として有効である。「今は宗教が互いに闘争を繰り広げる時代ではなく、さまざまな宗教が力を合わせ、道徳や精神の価値の衰退に対し、物質主義に対し、個人主義の行きすぎに対して戦うべきときなのです<sup>15)</sup>」。

その一方でサルコジは、ライシテの立場を正当化している。「諸教会と国家の分離という原理に依拠した国の元首として、どの信仰よりどの信仰がよいというような、私個人の選好については表明いたしません。私は、すべてを尊重しなくてはなりません。各人が自由に信じる権利、あるいは信じない権利を保障し、各人が尊厳を持ってみずからの礼拝を実践する権利を保障しなければなりません。私は、天を信じる者も天を信じない者も尊重します。私は、ユダヤ教徒であろうと、カトリック教徒であろうと、プロテスタントであろうと、イスラーム教徒であろうと、無神論者であろうと、フリーメーソンであろうと、合理主義者であろうと、各人がフランスで生きることに幸福と自由を感じ、彼らの信念、価値、出身が尊重されていると感じるようにしなくてはなりません<sup>16)</sup>」。

ここからサルコジは、「多様性の政治」という理念を導き出してくる。それは、「意見、文化、信仰、宗教の多様性の尊重」を「普遍的な原理にする政治」と規定されている。このとき大統領は、自分がイスラーム教徒の礼拝の実践のために CFCM（フランス・イスラーム評議会）を創設したことをアピールしつつ、フランスでイスラーム教徒が尊重されているのも「多様性の政治」の理念に拠るものだとして述べている。そして彼は、サウジ・アラビアやアラブ世界も、この「文明の政治」に依拠し、多様な考えを認めていくべきだと示唆する。というのも、「多様性は西洋の価値ではなく、あらゆる文明に共通の価値だ」からである<sup>17)</sup>。

サルコジによれば、多様性の尊重とは、批判を受けつけず対話を拒むような、文化相対主義ではない。彼が期待しているのは、アラブ世界が「精神の開放性と寛容の象徴」である「開かれたイスラーム」を築いていくことだ。そして、エジプトのムバラク大統領や、モロッコ国王モハメッド6世の近代的な政策に言及することで、（必ずしも改革に積極的とは言えないサウジ・アラビアの）アブドラ国王に対し、「進歩と伝統のあいだに調停」をもたらし、「イスラームの深いアイデンティティと近代を総合」するよう暗に促している。

以上のように、この演説においてサルコジは、宗教の共通性と多様性を同時に主張し、ライシテを正当化しながら宗教をたたえている。どちらも矛盾を孕みかねないアクロバティックな試みで、わかりにくいところもある。だが、サルコジがいかなる神を推奨し、いかなる宗教を評価しているかに注目すれば、狙いは見えてくる。

演説のなかで語られている神は、人智の及ばない超越神ではない。たしかに「超越的な神」と表現されているが、これは「それぞれの人間の思考と心のなかにいる」神で、「人間を服従さ

せるのではなく、人間を解放する神」である。また宗教は、「野蛮」に対抗する「文明」と位置づけられている。この宗教は、神の偉大さと人間の卑小さを強調するのではなく、「人間の尊厳」を価値づける。近現代の価値によって乗り越えられる宗教ではなく、その価値に合致し、さらには近現代の限界を補ってくれるような宗教である。実際サルコジは次のように述べている。「文明としての宗教」を尊重する「文明の政治」とは、「近代の逸脱に対し、技術や経済や金融活動の過剰に対し、汚染や環境の悪化に対して戦おうとする政治」であり、それは「持続的な発展」を目指すものである<sup>18)</sup>。

要するにサルコジは、宗教を近代的・現代的価値に合わせて規定し、そうした宗教に現代社会の行き詰まりを打開する役割を負わせている。レジス・ドゥブレは、このような宗教の持ち上げ方を批判している。サルコジは、神を「人間の法外な傲慢と狂気に対する防波堤」だとたたえているが、これは「一神教の神がその逆でもあったという事実を忘れることだ」というのである<sup>19)</sup>。

他にも多くの者たちが、大統領の演説はライシテの原理と理念に背くと考えた。「共和国のライシテを守ろう」との呼びかけは、3か月ほどで15万を超える署名を集めている<sup>20)</sup>。

### 3. CRIFの晩餐会での演説

リャドでの演説から1ヶ月後、サルコジはCRIF（在仏ユダヤ系団体代表協議会）が主催する年頭の晩餐会に参加した。サルコジ本人の弁によれば、この会に首相が招待されることは慣例となっているが、「共和国大統領」の参加は初めてだという。だが、実はユダヤ人解放200年周年に当たる1991年に、ミッテランが参加したことがある。いずれにせよ、サルコジには、いわば現代社会の「健忘症」を利用して、自分は前任者がやらなかったことに積極的に取り組んでいるとアピールするところがある。

CRIFの会長リシャール・ブラキエは、ライシテのことを、ユダヤ人に平等を与えた中立性の原理であると理解し、それは現実の問題に対する实际的な解決をもたらしてきたと高く評価している。ユダヤ教徒としてライシテを支持するブラキエの立場は、ライシテを遵守すべき立場にありながら宗教を価値化するサルコジの利害と一致する。

サルコジは、この晩餐会を利用して、ライシテ擁護派のあいだに巻き起こった批判に応じようとしている。実を言えば、それがこの晩餐会に参加する主要な目的であったと推測することができる。彼は、ラテラノやリャドでの演説に修正を加え、彼の推奨するライシテの内容を再確認している。

大統領は、ラテラノでの演説に寄せられた批判を踏まえてこう言っている。「私は、ライシテの道徳が宗教の道徳に劣るとは、断じて申しておりません。二つの道徳は相補的だと思います。そして善悪の区別が難しいときは——そのようなことは頻繁にはありませんが——両方の道徳



から着想を得るのがよいと思います」。「それから私は、学校の教師が、司祭やラビやイマームに劣るとは、断じて申ししておりません」<sup>21)</sup>。サルコジの弁によれば、教師は「正直」「寛容」「尊敬」からなるライシテの道徳を体現し、宗教者は「超越性」を体現している。これは優劣の問題ではなく、単に表わすものが違うだけだというのである。

その証拠にサルコジは、ライシテの道徳の復活を望んでいると言明する。「私は子どもたちが、学校でライシテの道徳の教育を受けることを望んでいます」。ライシテの道徳とは、1882年にそれまでの宗教的道徳に取って代わって公立小学校に導入された道徳で、重要な市民教育の機能を担ってきたが、1968年に機に廃止された。それはもともとカトリックの道徳への対抗意識を強く持ち、宗教から距離を置こうとする。ところが、サルコジが復権を唱えるライシテの道徳は、古典的なライシテの道徳とは異なり、宗教との出会いを可能にする。「子どもたちは、知的・人間的な形成の過程において、精神の問題や神の問題へと目を開いてくれる、熱心な宗教者に出会う権利があるのです」<sup>22)</sup>。

ここからサルコジは、宗教に積極的に接近する自分のライシテ解釈を正当化する。「ライシテの原理は〔……〕、私が司祭や牧師やラビや宗教者と出会う権利を奪うものでしょうか。私には、彼らが弱者たちのためにしていること——病人を勇気づけ、若者を教育し、囚人を社会復帰させること——は有益でよいことだと言う権利すらないのでしょうか。〔……〕ライシテの原理とは、共和国大統領が、交通安全、財政赤字、目に見える政治のみを語るよう強要するものなのでしょうか。生命、文明、愛、希望といった本質的な事柄を語ってはいけないのでしょうか」<sup>23)</sup>。

他方でサルコジは、宗教のよい面だけを見ているきらいのあったリャドの演説の調子に、修正を加えている。リャドの演説では、宗教は「野蛮」に対する「文明」として位置づけられているが、CRIFでの演説においては、宗教のみが悪に対抗できる唯一の手段ではないとされている。また、「宗教が人間を憎しみや野蛮から守る」ことに「無力」な場合もあると述べている。

だがサルコジは、ナチスや共産主義を例に挙げながら、「神なき世界」がまったく好ましいものではなかったとも示唆している。サルコジは、あたかも神の不在や宗教の後退が20世紀の歴史の悲劇を生んだかのような語り口を採用している。「何百万人もの人びとが戦争に巻き込まれ、飢えを味わい、家族から引き離され、収容所に送られ、殺されたという20世紀の悲劇は、神の観念の氾濫から生まれたものではなく、その疑いもない欠如から生まれたものです。共産主義は、宗教を階級支配の道具と見なしましたが、私たちはこの理論のなれの果てを知っています。ナチスは人種間の優劣を信じていましたが、この考えはユダヤ＝キリスト教の一神教とまったく相容れないものです」<sup>24)</sup>。

要するにサルコジは、一方では宗教の価値を相対化するものの、他方では「野蛮」な「ナチス」や「共産主義」を引き合いに出すことで、宗教の重要性を唱え続けることのできる位置を確保している。

一見ややこしいかもしれないが、サルコジの発想を支えているのは、かなり単純な善悪二元論



である。なるほど、それは「宗教＝善、非宗教＝悪」というところまで単純化されてはいない。サルコジはまさにこの種の「誤解」を解こうとして、CRIFでの演説に望んでいるからだ。だが、そこで採用されている図式は、要するに「寛容で多様性を認めるものは善、閉鎖的で暴力的なものは悪」という単純なものだ。それは結局、宗教であるか否かを問わないことになる。なぜならサルコジは、「寛容で多様性に開かれた」ライシテには何の不満もなく、この方向に沿う宗教を善い宗教とする一方で、硬直した教義に固執して暴力を行使するものは宗教であろうとなかろうと悪いと示唆しているからだ。ただ、CRIFでの演説においては、「非宗教」の極端な例によって「野蛮」が語られることで、全般的に「宗教」の価値が守られている。

それから、このCRIFの演説で注目されるのは、フランスのユダヤ人の経験を、フランス国民全体の歴史の財産にしようとしていることである<sup>25)</sup>。サルコジは、ショーアの記憶を全フランス人が共有すべき記憶と位置づけ、それを人種差別の撲滅やフランスの共通の将来の構築に活用（あるいは利用）しようとしている。具体的な構想としては、CM2（小学校5年目）の全生徒が、当時1万1,000人のフランスの子どもたちがナチスの犠牲になったことを学習できるよう、教育内容を整備することを考えている。サルコジは、教育大臣のザヴィエ・ダルコスに命じて、この計画を2008年の新学期から実行に移すようにしている。たしかに、ショーアの記憶を語り継いでいくことは重要だ。だが、その企てを政治家が主導するというのは、別の話ではないのか。サルコジは、悲惨な死を遂げた「殉教の子どもたち」を、「今の子どもたち」の「教師」にすることほど、「高貴な計画」は見当たらないと言う。だが、これは死者の政治的利用ではないだろうか。

#### 4. 教皇ベネディクト16世の訪仏時の演説

2008年9月、教皇ベネディクト16世は4日間フランスに滞在した。一番の目的は、ルルド聖母出現150周年を祝うことであったが、その前にパリを經由し、大統領の歓迎を受けている。

サルコジは、9月12日にエリゼ宮で行なった演説において、何百万ものフランスのカトリックにとって、教皇の訪問はたいへん喜ばしい出来事であり、自分もその喜びに参加するのは当然だと述べている。このようにカトリックとの特別な関係をアピールする語り方は、2007年12月にラテラノで行なった演説の延長線上に位置づけることができる。だが、そのときに受けた批判を踏まえて、カトリックとの関係「だけ」を特権化するようなやり方は控えられている。また、もはや小学校教師と司祭を対比するような語り方は採用していない。それから、フランスのルーツは本質的にキリスト教的だという代わりに、フランスの文化は「ギリシャおよびユダヤ＝キリスト教の思想、中世、ルネッサンス、啓蒙主義の遺産」という「混合的なルーツ」を持っていると述べている。

他方でサルコジは、宗教は「省察と思考の生きた遺産」であり、民主主義やライシテがそうした宗教——とりわけフランスではキリスト教——との対話を行なうことは「正当」とすると主

張し、再び「ポジティブなライシテ」を唱えている。「ポジティブなライシテ、開かれたライシテとは、対話、寛容、尊重への招待であります。いと尊き教皇聖下、神は、私たちの社会が対話、寛容、尊重、そして平安を必要としていることをご存知です」<sup>26)</sup>。

これは、政治の目指すところを宗教によって正当化しようとする言説とも取れる。あるいは、ライシテもカトリック教会も同じ目的を持っているとして、パラレルな関係を打ち立てる試みとも取れる。実際サルコジは、人間の尊厳を守ることに於いて、共和国と教皇庁は同じ役割を果たしてきたという趣旨のことを述べている。「教会は、人間の尊厳をたえず要求し、これを守ってきました。人間の尊厳をさらに保護する役割は、[……] 私たち政治の責任者に属しています」<sup>27)</sup>。このようなものの見方は、教会が人権を敵視していた時代もあった過去の歴史的事実を忘却することのうえに成り立っている。

また、サルコジは、教皇の演説によく見られる語彙（たとえば「希望」という言葉）を巧みに自分の演説のなかに取り込んだり、「利己主義」を批判したり、同じような調子を出すことによって、あたかも共通の仕事に取り組んでいるかのような効果を出している。

ところで、サルコジの推奨する「ポジティブなライシテ」ないし「開かれたライシテ」は、このエリゼ宮の演説にいたって、自家撞着を来たすことになっている。ラテラノでサルコジが「ポジティブなライシテ」を唱えることができたのは、形容詞を付加しないただの「ライシテ」が、「ネガティブ」ととらえられていたからだ。だがサルコジはその後、教師と司祭のあいだに優劣はないと発言を修正した。もはやライシテは、「ネガティブ」にはとらえられていないはずである。だとすれば、「対話、寛容、尊重への招待」は、「ポジティブなライシテ」によってはじめて可能になるものではなく、すでにただの「ライシテ」の特性なのではないだろうか。

ル・モンドの記者アンリ・タンクは、この点について、「ライシテを法制化した人たちにとって、ライシテという言葉はそれ自身で自足していたのだから、ライシテに（ポジティブな、開かれたという）形容詞を付加することは、彼らの着想を裏切ることではないだろうか」と述べている<sup>28)</sup>。『サルコジと神——一神教の政治的使用について』の著者、マルク・アンドローも、同じような批判を加えている。サルコジは、フランスのルーツは本質的にキリスト教だと宣言しておきながら、偉大な一神教は文明の担い手だからこれを守っていく必要があると発言を修正した<sup>29)</sup>。そして今度は、フランスのルーツを多元化した。サルコジは矛盾する主張を平気で行なうことにより、「ポジティブなライシテ」の意味を自己崩壊させたわけである。

今回もまた、ニコラ・サルコジは「ポジティブなライシテ」を主張した。ということは、彼はローマで12月20日に行なったラテラノ宮殿での論争的な演説の延長線上に在るのだろうか。いや、彼はまったく違ったところにいる。ラテラノで唱えられた「ポジティブなライシテ」の背後には、宗教にとって都合のいいように修正を施されるべきライシテの姿があった。これに対してエリゼでは、彼は「ポジティブなライシテ」という概念を再び取りあげているが、こ

ここでは、精神的なものであれば何でもポジティブだと言っている。ここにおいて彼は、ただのライシテの定義に合流している。ライシテは、そもそもポジティブなのだ。[……]今や彼は「ポジティブなライシテ」という言葉に違った意味を与えているのに、なぜこの表現を使い続けるのだろうか。<sup>30)</sup>

なお、サルコジの演説を受けた教皇は、フランスのライシテの行方というホットな話題にはあまり立ち入らないようにしているが、それでも次の発言には、サルコジの目指す方向に、教皇が共感している様子を看取することができる。「あなたは、このよりオープンな理解を形容して、「ポジティブなライシテ」という美しい表現[……]を使われました。歴史的に見て、さまざまな文化の交流がますます進んでいるこの時代において、ライシテの真の意味と重要性について、新たな省察をすることが必要だと私は確信しています。一方で、政治的なものと宗教的なものの区別をつけることは基本的なことです。それは市民の宗教的自由を保障するとともに、市民に対する国家の責任を明確にします。他方では、宗教が人間の心を形成するのに独自の役割を担っていること、そして宗教が他の機関と並んで社会における根本的な倫理的コンセンサスの創造に貢献することについて、明確な意識を持つことが必要なのです」<sup>31)</sup>。

## 5. 「ポジティブなライシテ」の陰に潜む「不寛容な市民宗教」と「アメリカ型の市民宗教」

ここまで、サルコジ大統領の4つの演説を順番に検討してきた。ラテラノの演説における「ポジティブなライシテ」は、「ネガティブ」なライシテ理解に支えられており、カトリック的伝統を再強化する意図がかなりストレートに表現されていた。だが、この演説がさまざまな批判を招いたことから、それ以降の演説では、カトリックを他の宗教やライシテの精神以上に価値化することがやや控えられ、「ネガティブ」なライシテ理解も修正されていった。アンリ・タンクやマルク・アンドローの指摘に従えば、もはや「ポジティブなライシテ」概念は有効ではない。だが、サルコジはこの表現を破棄してはいない。それはおそらくこの言葉が、現代フランスが目指すべきライシテの方向性と合致している印象を与えるような語感を有しているからであろう。

2003年に当時のシラク大統領が招集したスタジ委員会の報告書は、「共同体の権利要求」を強く警戒し、公立校における特段に目立つ宗教的標章を禁じる法律の制定を提言するなど、厳格な態度を取る一方で、現代フランス社会の価値多元主義的状况を踏まえ、公共空間を宗教に対して開いていくような提案もしている<sup>32)</sup>。現代フランスにおけるライシテが、このように「厳格な」方向と「開かれた」方向という一見相矛盾する2つの方向性を両立させようとしていることは、ひとつの現実であって、ひとまず大統領の介入の有無とは無関係に屹立している。筆者の見るところ、サルコジはこうしたライシテの動向を意識しながら、「悪い」宗教には厳しく、「善い」宗



教には好意的な自分を正当化している。このような構図になっているために、大統領が主張する「ポジティブなライシテ」は、一連の発言を経た結果、ひとつの概念としての意義を喪失したはずなのに、「開かれたライシテ」のイメージに連なる言葉として生き残っているであろう。この言葉は、たしかに「ポジティブ」というだけあって、明るいイメージを抱かせる。だが、そこには危うさのようなものもあるのではないか。

その正体を突き止めるために、「市民宗教」の観点から分析を加えたい。ルソーが最初に用いたこの言葉は、アメリカの社会学者ロバート・ベラーによって宗教社会学の用語として定式化され、かなり複合的な意味合いを持っている。ひとまずここでは、この用語の内容を頭から事典的に詳しく述べていくというよりも、この言葉を念頭に置きつつ、サルコジの4つの演説を振り返ってみよう。

大統領は、ラテラノの演説で、共和国とカトリックの絆を確認し、共和国は「信仰」と「希望」を持つ人を頼りにしていると述べ、政治家も「規範や信念を参照する見解」に基づきながら考えることが重要だと主張している。要するに、政治も超越性を参照すべきであるという趣旨の発言をしている<sup>33)</sup>。

リヤドの演説では、イスラーム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒はみな、「同じ信仰と希望の欲求」を持つとの持論を展開している。注目したいのは、このときの神は、いわば「脱宗派化」されているということだ。

CRIFの晩餐会での演説では、ライシテの道德と宗教的道德を区別する一方で、それらを相補的にとらえ、両者を有機的に関連させようとしている。そして、子どもたちが「スピリチュアルな問題や神の次元へと開かれていく」ことを望んでいる。ここには、宗教であろうとライシテの精神であろうと、利用できる精神的・宗教的資源はすべて動員しようという態度が窺える。

エリゼ宮の演説では、フランスのルーツを混合的なものとし、宗教の精神と世俗の精神を混ぜ合わせている。他方、神も「ポジティブなライシテ」の必要性を知っているなどと述べ、政治と宗教のあいだにパラレルな関係を打ち立てている。これは、ラテラノの演説に見られたような、政治に超越的な契機を持ち込もうとする態度に通じていよう。

いずれの場合も、サルコジは市民宗教の問題系に足を踏み入れている。少しずつ解きほぐしていこう。

ルソーが考案した市民宗教は、伝統的な宗教から解放された自由で平等な理性的な市民に、義務を愛させ、市民のあいだに紐帯をもたらしようとするものであった<sup>34)</sup>。伝統宗教からの解放という側面を重視するなら、サルコジの試みは、CRIFの晩餐会やエリゼ宮での演説に見られるように、伝統宗教とそこから解放された精神の双方を動員することであるから、違いがあるとも言える。だが、サルコジが目指しているのは、理性的な社会統合原理に欠けているものを、宗教(的なもの)によって補填することであると考えるなら、それはルソーの市民宗教論に合致する。

また、サルコジは、ラテラノの演説やエリゼ宮の演説に見られるように、超越的なものを参照



する政治のあり方を肯定しようとしている節がある。このような「政治の宗教的自己理解」という契機は、ルソー＝フランス型の市民宗教というよりも、ベラー＝アメリカ型の市民宗教に顕著な特徴である。

サルコジが、リャドでの演説において、神を脱宗派化している点も見逃せない。ベラーによれば、市民宗教の神は、特定の宗教の神であってはならず、社会の成員が信奉するさまざまな神を越え出るような、習合的な神でなければならない。アメリカでは早い段階で国家と諸教会の分離が達成されたが（1791年）、この「分離」は、さまざまな教派（デノミネーション）に共通するような神が政治の領域に現われ出ることを妨げなかったどころか、むしろ促進した<sup>35)</sup>。サルコジの語る神も、脱宗派化を遂げた市民宗教の神ととらえることができるだろう。

フランスとアメリカの政教関係史を比較すると、両国とも政教分離を原則としているが、フランスでは宗教の範囲が私的領域に限定される傾向が強いのに対し、アメリカでは政治の領域でも宗教が可視化されており、かなり対照的である。そのため、「フランスのライシテ」と「アメリカの市民宗教」は互いに隔絶した政教システムであるかのように語られることがあり、ともするとフランスは市民宗教とは無縁の国と見なされたりする。

だが、フランスにも市民宗教が存在しなかったわけではない。ルソーの市民宗教には、その教義に従わない者は「国家から追放することができる」という規定がある。国家が新たな宗教性に依拠して不寛容な政治を行なうとき、それは（フランス型の）市民宗教として現われる。革命期のロベスピエールは、カトリックの神に代わる最高存在の超越性に依拠しながら恐怖政治を行なった。20世紀初頭には、唯心論者を自称するエミール・コンブが、修道会に弾圧を加え、国家の一元的支配を強めようとした（彼は、ルソーの市民宗教に範を取っていることを証言している）。これらは、フランス型の市民宗教を志向するものととらえることができる<sup>36)</sup>。

ライシテとは、宗教の自由を保障するものであるはずだが、その一方で、既存の宗教に制限を加えるものとして発現することがある。このように宗教を抑圧するようなライシテ——「本来のライシテ」と区別して「ライシズム」とも呼ばれる——が肥大化していく場合、それは不寛容な市民宗教の系譜に連なりうる。

なるほど、サルコジは、宗教に期待をかける局面では、宗教に抑圧を加える市民宗教とはひとまず袂を分かť。しかしながら、彼はこのとき、もうひとつの市民宗教の論理に近づいている。この点について、ジャン・ボペロは次のように指摘する。サルコジは、「フランスのライシテを非常に共和主義的な市民宗教の方向に向ける誘惑から解き放つ大統領」になりえたかもしれないが、「フランスのライシテを別のヴァージョンの市民宗教、つまりアメリカ版の市民宗教に陥れてしまった」<sup>37)</sup>。

事実、サルコジの語る「ポジティブなライシテ」は、アメリカ版の市民宗教の輸入を思わせるところがある。フランスの共和主義は、これまで市民の集団的属性を括弧に入れ、個々の人間を抽象的市民として扱う普遍主義のモデルに依拠してきたが、現代のフランスは文化多元主義的な

現実を認めざるをえない状況にある。このような状況にあつて、サルコジは、社会的紐帯を新たに作り出していくための「道具」として、宗教やスピリチュアルなものを利用してゐる。

このような試みも、過去のフランスになかったわけではない。実際、ナポレオンのコンコルダート体制は、複数の宗教を公認し、それらを社会統合に役立てるものであつた。ただし当時は、プロテスタントやユダヤ教も公認宗教とは言ふものの、やはり中核となつてゐたのは「フランス人の大部分の宗教」であるカトリックであつた。現代は、それとは比較にならないくらい、多元主義が進行している。また、宗教の社会的役割を認めるにしても、公認宗教体制と政教分離体制とでは、その意義は異なってくる。政敵のフランソワ・バイルーは、サルコジの宗教政策を指して、もはやフランスでは不可能な「国家と宗教の混同」へと舞い戻ることだと批判している<sup>38)</sup>。

ライシテの原理に即して考えれば、国家は宗教やスピリチュアルなものの自由を保障するものなのであつて、国家と同じ目的を宗教やスピリチュアルなものに共有させるものではない。宗教的自由とは、そもそも政治目的に供されるようにはできておらず、市民社会における宗教の領域に留まることによってその自由を享受するものである。

それゆえ、宗教やスピリチュアルなものに対し、政治と同じ目的を持たせようとするサルコジ大統領の試みは、ライシテからの逸脱、とりわけ宗教的自由の侵害になりかねない。なるほど、彼が目下推奨している「ポジティブなライシテ」は、むしろアメリカの市民宗教モデルに近づこうとするものだ。だが、もし仮に、宗教と政治に平行関係を打ち立てる試みが強行されるようなことがあれば、それはアメリカ型の市民宗教に背を向けて、今度は不寛容なフランスの市民宗教に連なるおそれがある。なぜなら、サルコジには「宗教の善悪二元論」があつて、「寛容」で「対話」を重視し「多元性」を認める宗教は「文明」を形作り発展へと開かれた「善い宗教」だが、「不寛容」で「閉鎖的」で「暴力」を行使するような宗教は「野蛮」な「悪い宗教」だという論理があるからだ。問題は、政治の理念に適う宗教を「善い宗教」とし、そうでない宗教に「悪い宗教」というレッテルが貼られるとき、「不寛容」と判断された宗教に対して政治が「不寛容」な態度で臨む危険があることだ。実際、サルコジの内務大臣時代には、このような不寛容な市民宗教の系譜に連なりかねない彼の姿が見られた。たしかに大統領となつてからは、アメリカ型の市民宗教に向かう姿勢のほうが目立つように見える。だが、彼から見た「悪い宗教」が、フランス型の市民宗教の弾圧の対象となる可能性が排除されたわけではないのである。

## 結 語

本稿の議論をまとめながら、この先のフランスのライシテの展開とサルコジの「ポジティブなライシテ」の関係について、一定の見通しを与えてみたい。

サルコジ大統領がラテラノの演説において提唱した「ポジティブなライシテ」は、旧来のライシテについての「ネガティブ」な理解に基づいてゐた。その後、「ネガティブ」なライシテ理解

を修正した以上、「ポジティブなライシテ」の意味は、実際にはよくわからなくなっている。ただし、この言葉自体が簡単に廃棄されることはないだろう。

この言葉は、カトリック的伝統の再強化という意味にも、宗教的資源一般の政治的利用という意味にも、社会統合理念としてのライシテの精神の再動員という意味にもなりうる。耳触りのよい言葉ではあるが、不寛容な市民宗教に化けるおそれが完全に払拭されているわけではなさそうだ。他方、アメリカ型の市民宗教に近づくことで、宗教が政治目的に供され、宗教的自由が骨抜きにされるという可能性も否定できない。注意しながら見守っていく必要があるだろう。

現在のライシテは、価値多元主義の挑戦を受けながら、いかに社会統合を実現していくかを課題にしていると言える。社会統合の実現は、不寛容な市民宗教によってなされてはならず、さまざまな価値観は、互いに衝突して公共の秩序を乱すようなものであってはならないが、過度の抑制を強いられることなく、公共空間を豊かにしていくことが望ましいであろう。

サルコジが推奨する「ポジティブなライシテ」は、一方では、いかにもこの課題に正面から向き合っているかのような印象を与えるのだが、他方では、理念を提唱し続けながら、実態をさじ加減で変えていくことができるような、あまり信用のおけない言葉であるようにも思われる。そうであればこそ、したたかな彼が、さまざまな批判にもかかわらず、容易に手放すことのない言葉でもあるのだろう。

#### 【付記】

本稿のもとになっているのは、南山大学地域研究センターの共同研究「宗教と政治のインターフェイス」研究会での発表（2009年2月）である。発表の機会を与えてくださった、南山大学ヨーロッパ研究センターの丸岡高弘先生、森千香子先生に、記して謝意を表したい。

#### 註

- 1) フランスでは、内務大臣は、宗教担当大臣でもある。
- 2) サルコジの内相時代の宗教政策とその基本的な態度については、すでに伊達聖伸「ニコラ・サルコジの宗教政策、あるいはライシテの行方」『国際宗教研究所ニュースレター』56号、2007/3、pp.13-24.においてまとめている。
- 3) 4つの演説はいずれもオンライン参照可。本稿も、インターネットからダウンロードしたものを資料にしている。
- 4) エマニュエル・ミニオンは1968年生まれ。次に引用する2004年の彼女の発言は、サルコジとの距離の「近さ」を物語っていよう。「私はいつでも保守派だった。私が好きなのは秩序だ。私が信じているのは、個人の主導権、個人の努力、それから経済については、市場の見えざる手の原理だ」(*Le Monde*, 7 septembre 2004)。フィリップ・ヴェルダンは、1966年生まれ。以下に掲げるサルコジの本は、彼とチボー・コランからのインタビューという形式を取っている。Nicolas Sarkozy, *La République, les religions, l'espérance: Entretiens avec Thibaud Collin et Philippe Verdin*, Paris, Cerf, 2004.

- 5) Nicolas Sarkozy, «Allocution de M. le président de la République dans la salle de la signature du palais du Latran», Rome, 20 décembre 2007, [http://www.elysee.fr/documents/index.php?mode=cvview&cat\\_id=7&press\\_id=819](http://www.elysee.fr/documents/index.php?mode=cvview&cat_id=7&press_id=819).
- 6) Ibid.
- 7) Ibid.
- 8) *Le Figaro*, 4 janvier 2008.
- 9) <http://blogdesebastienfath.hautetfort.com/archive/2007/12/21/discours-de-latran-quand-nicolas-sarkozy-fait-un-pied-de-nez.html>
- 10) *Le Monde*, 21 janvier 2008. [http://www.lemonde.fr/politique/article/2008/01/21/jean-bauberot-le-discours-de-nicolas-sarkozy-porte-atteinte-a-la-laicite\\_1002020\\_823448\\_1.html](http://www.lemonde.fr/politique/article/2008/01/21/jean-bauberot-le-discours-de-nicolas-sarkozy-porte-atteinte-a-la-laicite_1002020_823448_1.html)
- 11) Ibid.
- 12) *Le Monde*, 24 janvier 2008.
- 13) レジス・ドゥブレ「あなたはデモクラットか、それとも共和主義者か」(水林章訳), レジス・ドゥブレ, 樋口陽一, 三浦信孝, 水林章『思想としての〈共和国〉』みすず書房, 2006年。
- 14) Nicolas Sarkozy, « L'allocution prononcée à Riyad par le Président de la République », 14 janvier 2008, <http://www.ldh-toulon.net/spip.php?article2470>.
- 15) Ibid.
- 16) Ibid.
- 17) これは西欧の価値の押しつけのようにも見える。だがサルコジは、アブドラ国王が2007年11月にヴァチカンで行なった——この訪問は「歴史的な出来事」と言われている——次の発言を見逃さず、演説のなかで引用している。「あらゆる宗教、信仰、文化のなかには、何か普遍的なものがある。それが、あらゆる人間に、自分たちが人類をなしているのだということを認識させてくれる」。
- 18) Nicolas Sarkozy, « L'allocution prononcée à Riyad par le Président de la République », op.cit.
- 19) *Le Monde*, 24 janvier 2008.
- 20) <http://www.appel-laique.org>
- 21) Nicolas Sarkozy, « Dîner annuel du CRIF : Allocution de Monsieur le Président de la République », 13 février 2008, [http://www.elysee.fr/documents/index.php?mode=view&lang=fr&cat\\_id=7&press\\_id=1043](http://www.elysee.fr/documents/index.php?mode=view&lang=fr&cat_id=7&press_id=1043).
- 22) Ibid.
- 23) Ibid.
- 24) Ibid.
- 25) さらにこの演説では、フランスとイスラエルの関係、中東和平のヴィジョンについても言及されているが、ここでは深く立ち入らない。
- 26) Nicolas Sarkozy, « Discours de Nicolas Sarkozy à l'Elysée devant le pape Benoît XVI », 12 septembre 2008, <http://www.la-croix.com/documents/doc.jsp?docId=2349606&rubId=1306>
- 27) Ibid.
- 28) *Le Monde*, 14 septembre 2008.
- 29) Marc Andrault, *Sarkozy et Dieu, de l'usage politique des monothéismes*, Paris, Berg International, 2008.
- 30) *Rue89*, 14 septembre 2008.
- 31) Benoît XVI, « Discours de bienvenue du pape Benoît XVI lors de son arrivée, au palais de l'Élysée », 12 septembre 2008, <http://www.eglise.catholique.fr/download/1-1983/rencontre-avec-les-autorites-de-letat-lelyse-en-francais.pdf>.
- 32) Commission de réflexion sur l'application du principe de laïcité dans la République, *Rapport au Président de la République*, 11 décembre 2003.
- 33) ル・モンドの記者アンリ・タンクの指摘による。*Le Monde*, 21 décembre 2007.
- 34) ルソー「市民宗教」『社会契約論』(桑原・前川訳), 岩波文庫, 1954年(原1762年)。



- 35) ロバート・ベラー「アメリカの市民宗教」(原 1967 年)『社会変革と宗教倫理』(河合秀和訳) 未来社, 1973 年。
- 36) 伊達聖伸「ライシテは市民宗教か」『宗教研究』354 号, 2007 年, pp. 1-24.
- 37) Jean Baubérot, *La laïcité expliquée à M. Sarkozy... et à ceux qui écrivent ses discours*, Paris, Albin Michel, 2008, p. 126.
- 38) *Le Monde*, 8 février 2008.